

〔主張〕 学校経営の主体性を発揮するには

栃木県小学校長会副会長 村上 雅之



ばならない。

本校の出した結論は『通常の登校時間で登校させる』というものであり、その他については個別の対応をする旨を教職員に伝えた。

金環日食が県内で観測できた五月二十一日、世紀の天体ショーは大変素晴らしいものであった。しかし、校長として当日を迎えるまでに考えるべき要件があった。

第一に「子どもが太陽を肉眼で見ってしまうのではないか」「登校途中の観察による交通事故の危険はないか」などの安全上のことである。第二に、理科教育の面で、学校はどのような役割を果たせばよいのか。第三は本校児童の家庭状況、地域の実態である。この三点を総合的に勘案し、最も適切な対応を判断しなければ

ているか。また、PTA、地域からいかに良質な実情の提供を受けられるかである。この現状把握が適切な判断をする際の大きな要となる。

二つ目は、情報収集である。校長の得る情報は、個人の情報収集、県教委

〔主張〕 学力向上は学級集団づくりから

栃木県小学校長会副会長 田崎 教子



や市町教委の提供によるところが多いが、校長会組織における情報共有も大きい。学校相互の情報交換の活発化を推進するとともに、校長会の組織力を生かし、情報収集、発信をし、活用する必要がある。

日本の大地を大きく揺るがした東日本大震災は、これまでの人々の価値観や生き方を根底から覆すほどの大きな出来事でした。大自然の脅威は、金銭や物質的な豊かさを追い求めてきた私たちに、幸せとは何か、何を大切に生きて生きるべきかを示しました。

一方、社会に目を向けると、子どもも大人も夢や希望をもつことが困難であったり、意欲を失いがちであったりという現実があります。子どもは自分に自信が持てず人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見受けられます。このような中で私たち教職員は、学習指導要領に示されている確かな学力を基盤とした「生きる力」の育成を目指し確固とした歩みを進めて行かなければなりません。

確かな学力の向上は私たちの喫緊の課題ですが、学力を向上させる上で、よりよい学級集団づくりが大きな意味をもつものと考えます。栃木県教育委員会の「学業指導」に示されているように、子どもはどのような集団に属しているかでその成長が大きく異なってきます。子どもに高め合うことのできる「学びに向かう集団」が強く求められています。ルールが確立され、思いやりのある人間関係が構築された学級集団においては、子ども一人一人の学ぶ意欲が高まり、確かな学力の向上が図れるものと考えます。

震災後、改めて見直されている人と人とのつながりや支え合いの大切さを心に刻み、子ども一人一人の健やかな成長を目指して精一杯努力したいと思います。